

学校外で諸活動中の地震への対応について

・本校児童生徒が行う校外での諸活動としては、以下のようなものが考えられる。

諸活動	目的地	交通手段	自校被災	集団規模	応援態勢
修学旅行 (泊を伴う) ※宿泊中	県外、かなり遠方	電車、船、飛行機など ※公共交通機関利用中	可能性低い	学年	遠方なので捜索への応援は困難。現地の教師により、初期の捜索、避難を行う。保護者への連絡、現地待機に備えての応援等は、学部内で行う。
宿泊学習 (泊を伴う) ※宿泊中	県内または近隣の府県	スクールバス ※スクールバス乗車中	同時被災の可能性あり	高学年のみ、または学部全体	現地の教師により、初期の捜索、避難を行う。 自校の被災状況により、他学部からの応援を行う。
遠足	県内または近隣の府県	スクールバス ※スクールバス乗車中	同時被災の可能性あり	学部全体	現地の教師により、初期の捜索、避難を行う。 自校の被災状況により、他学部からの応援を行う。
学校間交流	県内	徒歩またはスクールバス ※スクールバス乗車中	同時被災の可能性高い	学部全体、または学年	現地の教師により、初期の捜索、避難を行う。
学年校外学習	県内または近隣の府県	電車、バスなど ※公共交通機関利用中	同時被災の可能性あり	学年	現地の教師により、初期の捜索、避難を行う。 必要に応じて応援態勢を組む。
職場実習	県内 県外		同時被災の可能性高い	学年、又は個別	教師がつかずに事業所に依頼している実習も多いが、必ず教師か保護者が事業所へ向かう。 ※実習は基本的には巡回指導。何かあれば学校から職員が出向くというのが基本姿勢。 ※特に、高等養護部の場合は事前に保護者に協力要請する必要がある。
個別で実施する交流学習	県内	徒歩 (教職員は車、公共交通機関、徒歩)	同時被災の可能性高い	個別	小学部は現地への送迎は保護者、指導は教職員が行っている。すぐに保護者に連絡をとり、引き渡すことは比較的可能。

※考えられるパターンとしては3通り。

- ・学校も、校外に出ている者も同時に被災
- ・校外に出ている者は被災したが、学校は無事
- ・学校が被災したが、校外に出ている者は無事

} 上記の表ではこの場合を想定している。

《 地形や周囲の状況を判断して、安全確保の指示」～「安全な場所へ避難」》

■ 校外学習全般を通じて

[事前に準備すること]

- ・実地踏査の際に最寄りの避難場所の位置を確認しておく。(避難予定場所については保護者配布の文書などに記載する。)

[室内にいるとき]

- ・初期行動は校内で授業中にとる対応と同じ。
- ・避難経路の安全確認を行う者、避難誘導をする者と分担して連携しながら建物外に避難する。児童生徒を取り残さないように、避難開始前に人数確認を行う。

[屋外にいるとき]

- ・倒壊や火災、爆発の恐れのある建物から、児童生徒をすばやく遠ざける。
- ・狭い場所や狭い道路では塀・看板の倒壊や落下に注意し、児童生徒をすばやく広い場所に出させる。
- ・海岸では津波、山間部では崖崩れに注意し、安全な場所に避難させる。

■ 修学旅行

[移動しているとき]

- ・電車・バス等に乗車中の場合は、乗務員の指示に従う。児童生徒にとっさの安全確保ができるような乗車姿勢と態度をとらせておく。
- ・地下鉄や地下街からは、揺れがおさまり次第速やかに地上に出る。
- ・スクールバス乗車中はバスが停車し、揺れがおさまるまで待機状態になるので、とっさの安全確保ができるような乗車姿勢をとらせておく。

[宿舎に滞在しているとき]：

- ・宿泊場所の管理者の指示があればそれに従う。
- ・夜間の睡眠中には、建物の構造に不慣れなことから特に混乱が生じやすいので、あらかじめ非常口や避難経路を確認しておく。
- ・火気使用中の場合は、火災発生の恐れがあるので、注意。

■ 宿泊学習

[移動しているとき]

- ・スクールバス乗車中はバスが停車し、揺れがおさまるまで待機状態になるので、とっさの安全確保ができるような乗車姿勢をとらせておく。

[宿舎に滞在しているとき]：

- ・宿泊場所の管理者の指示があればそれに従う。
- ・夜間の睡眠中には、建物の構造に不慣れなことから特に混乱が生じやすいので、あらかじめ非常口や避難経路を確認しておく。
- ・火気使用中の場合は、火災発生の恐れがあるので、注意。

■ 校外学習

[移動しているとき]

- ・スクールバス乗車中はバスが停車し、揺れがおさまるまで待機状態になるので、とっさの安全確保ができるような乗車姿勢と態度をとらせておく。

■ 学年校外学習

[移動しているとき]

- ・電車・バス等に乗車中の場合は、乗務員の指示に従う。児童生徒にとっさの安全確保ができるような乗車姿勢と態度をとらせておく。
- ・地下鉄や地下街からは、揺れがおさまり次第速やかに地上に出る。

■ 職場実習等

- ・担当学部で登下校中の対応などと合わせて検討。

■ 学校間交流

[移動しているとき]

- ・スクールバス乗車中はバスが停車し、揺れがおさまるまで待機状態になるので、とっさの安全確保ができるような乗車姿勢をとらせておく。

[交流しているとき]

- ・相手校の管理者の指示に従う。

■ 個別で実施する交流学习

[交流しているとき]

- ・相手校の管理者の指示に従う。
- ・児童、保護者と行動を共にし、安全な場所まで避難する。

《 児童生徒の安全確保 ～ 学校への連絡、状況報告、指示等 》

■ 修学旅行、■ 宿泊学習、■ 学年校外学習等

- ・不明者がいた場合は、分担して発見に努める。
- ・負傷者には応急手当や病院への搬送など、適切な手立てをとる。
- ・児童生徒の安全が確認でき次第、現地にいる教職員で分担する。(①②④は必ず必要)
 - ① 児童生徒と待機、不安を緩和
 - ② 現地の状況を把握
 - ③ 現地の警察など公共機関に協力の依頼
 - ④ 学校へ連絡を取り、今後の指示を受ける。
 - ⑤ 必要に応じて、宿泊等の対策を講じる。
- ・随時状況などを学校に報告する。特に避難場所から移動する際には必ず連絡を入れる。
- ・連絡方法は以下の通り。どの手段も熟知しておくこと。
 - ① 携帯電話→固定電話（音声通話）
 - ② 携帯電話→学校携帯電話（音声通話）
 - ③ 公衆電話→固定電話（音声通話）
 - ④ 公衆電話→学校携帯電話（音声通話）
 - ⑤ 携帯メール→学校携帯メール
 - ⑥ NTT災害伝言ダイヤル
 - ⑦ 携帯電話災害伝言板
- ・伝達事項として：「誰が」「どこで」「今後どうする」など5W1Hが基本

《 応援部隊の派遣 》

- ・以下の観点から応援部隊の派遣を検討する
 - 負傷者の有無
 - 現地の被災状況
 - 交通機関の復旧の見込み

- 学校からの距離
 - 現地までの交通手段の状況
 - 自校の被災状況
 - その他
- ・ 応援部隊を派遣する際、交通状況、道路状況などから派遣手段を検討する。

《 保護者への状況・対応についての連絡 》

- ・ 学校から保護者に対応について連絡をする。
- ・ 現地の教職員は児童生徒の安全確保、および周辺の情報収集にあたる。
- ・ 現地での引き渡しの場合は、現地責任者（各クラス担任）の連絡先（携帯電話番号や携帯電話メールアドレス）を伝える。
- ・ 複数の手段で対応についての決定事項を保護者に連絡する。

複数の手段：緊急連絡先への電話連絡←学校から
携帯メールを活用した連絡システム
NTT災害伝言ダイヤル
携帯電話災害伝言板

連絡内容：被災状況（本人、現地）
引き渡し方法などの対応事項
現地責任者の連絡先（携帯電話番号や携帯電話メールアドレス）
⇒現地での引き渡し時のみ

《 保護者への引き渡し 》

[学校へ帰校]

- ・ 校内で被災したときと同様の対応。

[現地避難場所で待機]

- ・ 現地で引き渡しカードによる引き渡し
- ・ 保護者が現地到着後は現地責任者の教職員との間で現在地などの連絡を取り合う